

獅子吼

わのく獅子王の心を取り出して
いかに人おどすとも

怯することなかれ

獅子王は百獸に怯じず

獅子の子、またかくの如し

彼等は野干の吼ゆるなり

日蓮が一门は獅子の吼ゆるなり

弘安二年十月一
聖人御難争日

鷺峰才5号 目 次

夏期学生行脚布教紀行特集

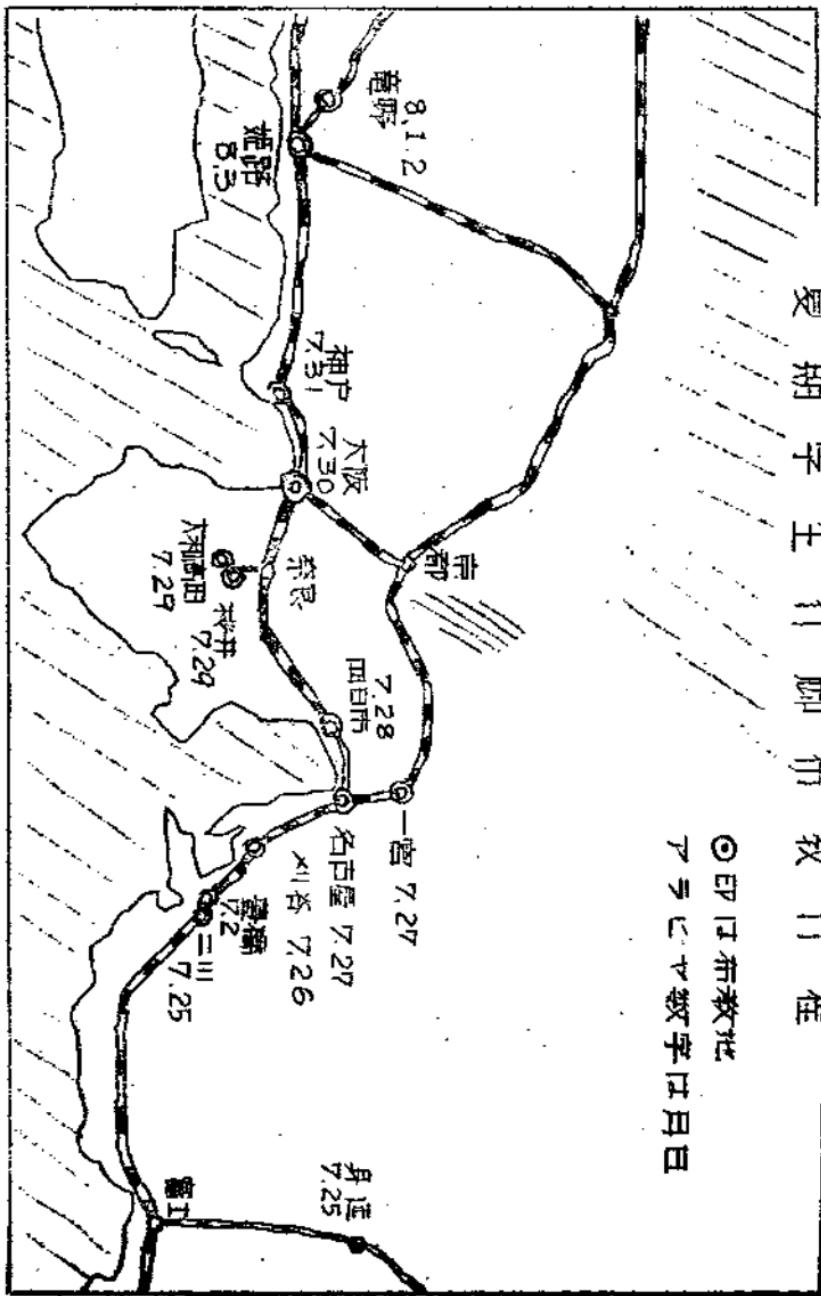
関西一府四県に轟く大法鼓 1

本誌の題字と題号 21

表紙の次第 46

夏期学生行脚布教行程

◎印は布教地
アラビヤ数字は月日



関西一府四県に轟く大法鼓

はじめに

本誌才四号既報の如く、鷺峰会主體とする身延山学生僧の有志而教隊およそ三十余名からなる、夏期休暇を返上した関西行脚布教は、去る七月二十五日より八月三日に至る丸十日間、新盆から旧盆の期間を選び愛知県下の豊橋、刈谷、尾張一・宮、名古屋、三重県

下の四日市、奈良県下の大和高田、桜井、大阪府下の大坂、布施、兵庫県下の西・宮、神戸、竜野、姫路という順路に従い、一府四県十三都市において、それへ現地宗教所、管内布教師会、修法師会、檀信徒協議会、護持会等々の主催または後援によつて地区寺院、檀信徒総動員のもと、折からの炎暑にも拘らず、各都市々民の耳目を

驚倒せらるはかり感風堂々と展開された。この学生行脚布教は昨年夏以来、丸一ヶ年目に当る才四回目の布教である。

布教に先きだち、今までの行脚布教の偉大な成果をかんがみて今回より特に身延山望月總務、岩間布教部長から、光榮ある「身延山術類布教別動隊」という名稱が与えられ、布教部派遣といつ体制の方に多大なる援助もなされた。相し学生の自発的企画、行動、旅費も自弁、といふ自主性には斐り

あるものぞ目なし。ちひみに身延山布教部曰高自衆而を隊長とする学生隊員氏名は左の通り。

身延山大學三年

同 次田寛象、浜島法立、藤森義象
同 二年 小林白峰、谷口正親、川本義祥
木村義質、早坂本勝、藤井宣志

同 一年

石橋 隆

身延山高松三耳

石川義治、兩宮文敏、近藤達也

同二年

袖藤文四、菊野由郎、安久修学

動使河原豊彦

同一年

竹内洋起、阿野由明

曰蓮宗布教研修所二期生

清水英雄

同三期生

吉松白鸞

同四期生

渡辺正信、木村幸俊、高田前敬

○街頭布教四大題目

一、立正世界平和の具体的実践道

二、日蓮聖人の正意

三、身延山の尊嚴

四、創価学会の折伏

○街頭布教用教義内容

一、人間礼拝と徹することこそ

信仰実踐の極地である。

二、祈りなき平和はありえない

敵とも祈る心に徹ヒよ

永遠の光りはその祈りより生ず

祖山をあとに

しりん満載、清水君、佐々木君の運転で、初日の布教起点豊橋市二川へ出発。

七月二十五日夜半の二時、轟声機を装備したトヨペット・マスター・ラインの布教車は、玄旗二本、場帶マイク二台、布教車と本隊との連絡用場帶無線機一組、二種の教書六万枚、布教参加の信徒に配布する宮沢圓石の詩「雨ニモ負ケズ」のポスター一万枚、講義用テキスト千部、そのほか隊員各自の着替衣用荷物、医療品、等々ぎつ

未明の四時、墨染の衣に五箇の袴姿、手甲、脚絆に白の股下足袋、身延山の三字を染めめいた白絲巻の上には綱代笠、一尺三寸のウチワ太鼓は肩よりつるし、漂々しく身を固めた学生隊員は、寝敷して祖廟に集合・御廟塔に向って誓護布教の達成を祈る。

我等、今まで四方面行脚布教の長途につかんとする。頗くほ

大型人の尊靈、我等が更に者らに
給ト、諸天昼夜に用意宿護し代等

をして宗月宣場に設立をしめ給え

……

轟鼓才一聲 二川町に

ふたぢや

一夜一睡もとす出動準備をした布
藝隊は、拂曉五時十三分身延駅発
一番電車に来り込み、富士駅から
東海道を西下、午前九時四十二分
豊橋より一駄年前の二川につく。
この日、午前中は豊橋市郊外の
二川町、午後は豊橋中心市街、共

既に駿前広場には宗務所長小幡
潮産師をはじめとして宗務所役員、
隣接寺院住職、檀信徒およそ百二
三十名が轟鼓待機して いる。

午前十時、布教車、二流の玄関
旗、現地管陣、身延山布教隊、現
地檀信徒の順に隊列を整え、二川
町、妙果寺へ向つて行動開始。
にわかに起る大音響、堂々の大
行進、町民は驚き、斬^ノことに飛び
出して沿道人垣をつくる。先導の

に愛知県下宗務所の後援による布

布教車は、マイクで休みなく街頭

布教の趣旨を叫ぶ。百数十丁の法

鼓は市街をふるわし、見守る市民
へ次々に教義がくぼられる。

妙泉寺住駄吉鳳通萬福の子息鼓

一君（六才）が白衣・手甲・脚絆

のいでたちで、右手は妙泉寺のチ
ヨウチン、左手は尊父吉鳳通萬福の衣
の袖をつかんで、既々として陣頭
を歩くのは、えきしい。

十一時妙泉寺に到着・わずか一

時間の行程中にも全員すでに白衣
も衣も服装までも、じゆ、くり汗

にぬれている。

休む間もなく吉澤相尊師のもと、
講堂あふる、僧隣、檀信徒と共に
立正世界平和祈禱、つゞいて日高
隊長の講演・講題は「身延山と創
価学会」

創価学会が身延山を説誘する所
から、曰蓮聖人の身延入山の真意
を用頭し、身延山こそ大聖人が蒙
古大襲来という困難に対して全人
類の宿業を一身に背負つて仏天に
機縛熱禱し、滅後夢を身延に留め
てまで人類の行くすえを見護らん

とされた人衆の聖地であると獅子

吼。

亂。

午後十二時三十分、現地の人々

と別れを惜しみつゝ布教隊は次の

布教地豊橋市街へ向う。豊橋市街
は、大法寺といふ日蓮宗寺院だ。
一ヶ寺・創価学会の本拠する所。

既に入手された情報によれば、市
内要所／＼にはり出された街頭布

教宣伝ポスターや教義は、毎夜の
ように創価学会のため破り捨てら
れているといつ。学会との激突も
予想され、隊員の斗志全身にみな

午後一時九分豊橋駅につければ、
改札口には自動車で先着した小幡
新長以下現地檀信徒およそ三百名、
妻敷の法首を轟かして出迎えてい
る。

見れば駅の一隅に創価学会員三
十名がたむろして、こちらの方
を監視している。さっそく布教隊
学生の一人がツカ／＼近寄つて挨

学生会云折伏

豊橋布教

殺した。

「お出迎え柳吉男さん」

学会員は鳩が立敷席をくらつた
ままでする。

獅子吼の一聲は駄頭より始まる。

小倉所長の挨拶につづいて立正世
界平和・創価学会折伏の雄叫びは、
学生布教隊員の交互に握るマイク
を通じて、イン〜と駄前ビル街
にこだまする。

午後一時四十分行進開始、やけ
つくる炎暑の中、三百七十丁
の法鼓は堂々一列縱隊、延々長蛇

の列をなす。

その後を、監視するつもりか三
十名ばかりの創価学会員が、引
かれ者のように見えてかくれつ
いて来る。

市内目抜き通りを限なく裏敷宣
令、松葉公園、市役所前附近、神
明公園にてそれべく衛観説法。午
后四時石田町ヒ画堂の丘の麓につ
けば町民百二、三十名、子供まで
がこぞって出迎える。期せずして
丘陵の山肌は数百の人と法鼓に埋
められ、さながらマンタラへ巧緻

聚）の山のよう。

午后五時三十分、花田錦町の大法寺に到着、四時間半に及ぶ市街大行進を終り、直ちに小幡所長尊所のもと立正世界平和祈願法要、つづいて、「法華經の菩薩道と創始学会の癡道について」と題する日高隊長の講話、その講話中、大法寺の門前で十数名の学会員がたをうするのを布教隊員が発見し、

「どうぞ本堂へお上り下さい」

と案内すれば蜘蛛の子を散らすようだ四散する。講話のあと日負

疑心答の座談会、終つたのが夜の十時、それより入ると遅い夕食、大法寺住仏は石橋妙定法尼、布教隊員石橋隆君（大学一年）の伯母でこんなに当り、学会の多い豊橋市内で日蓮宗の私賣を譲り抜いていく。隊員一同、法尼の親身も及ばぬ款待に、十時以降はあたかも親戚の家にでも泊つた思いでくつき、明日の布教準備を整える。

思えば昨夜来一睡もせずに汽車にゆられ、午前十時二川より始まつた豊橋布教は文十二時頃、予想

されど学会反対の見るべきほどのものはなかつたにせよ、さすがに鳥の如く疲れ果て、十二時就寝と同時に全員泥のような眠りにおちる。

玄題旗刈谷へ

明くれは七月二十六日（布教二日目）、この日は三河宗務所後援にて刈谷布教、大法寺石橋法尼以下信徒十数名と共に豊橋発八時五十分、刈谷へ向う。

その車中、回答をしかりて来た

学会青年が、遂に競争されて改宗し、その場で、持つていた数珠をアツツリ引き切るという一幕も起る。

九時四十八分刈谷駅につければ、小幡所長は昨日につづいて再び陣頭に立ち、市内長遠寺住弘寺田聖護師、隣接寺院各聖、刈谷身会道場主管浜島妙灌法尼をはじめとする刈谷布教、大法寺石橋法尼以下信徒十数名と共に豊橋発八時五十分している。

学生倒る

正十時、市教は駅前広場の獅子

門より始まる、市内中央繁華街の

本小路通りを行進し、最も賑かな
四辻にマイクをすれば、まさに
舌彌火を吐くかの如く立正安國の大義を叫ぶ。

その布衆中、早くも隊列の中の
学生一人が負傷して路上に倒れる。
高二の阿部由良君である。幸い実
家が董橋であり、お母さんが初日
以来、自家用車を運転して行進に

参加している。直ちに急救、その
日の宿泊所外各身延会道場へ運び、
医者の手当をつけさせること。

寒暖計は屋外三十六度を越え、
市教車の中は四十度にも昇つてい
る。連日の睡眠不足、心身温度の
緊張と激労、その上木暮じなし市
街のアスファルトの蒸り返しに堪
えぬく苦痛は、意識に達するもの
がある。既に数名、意識を失ひ、お
腹回のほか口もきけない。

然し同類は薬物、体力の限界が
来れば、その限界を越ゆる意念力

をもつて前進せねばならぬ。体力とエネルギーの問題、そこには眞の修業があり、この修行を通して眞の布教が全うされる。

犠牲若が出れば出るほど隊員はます／＼斗志を奮い起し、更にかずれて声をふりしほってお題目を唱え、更に力をこめて法鼓をうちならし、しかも隊伍一糸も亂さず行進を続ける。

名鉄刈谷市駅前広場に到つて再び街頭説法。気鋒賛美の心態を奪う。東海街道を経て元町の長遠寺に参拝。在弘寺田所の導師で立正世界平和祈願、終つて中食、冷えたスイカの味に蘇生の恩いをする。午後一時長遠寺を出发、銀座通りの四辻で街頭説法、ここで日現在地寺院各聖が交互にマイクをとり立正世界平和と学会祈願を力説要大の恩賜を与える。

市内宝町の刈谷身延会道場についたのは、午後の三時、全員観音菩薩の中でも毅然として小幡所長尊師のもと立正世界平和祈願。つづいて、「人類の平和と日本人の

使命」と題すす日高隊長の講話。

刈谷延会道場主豊浜島や彦法

十時半

尼は隊員兵島法立君（大学三年）の実母に当る。全國我が家のようなくつろぐ一方、別室で病床に伏していの阿野君の容態をみて、「お母さんと一緒に豊橋のお家へ帰るようだ……」

と言えば、本人無念のあまり男泣きた泣く。代りに弟の阿野由明君（高校一年）が参加する。

夕刻七時より予定通り信徒と共に一時間の唱誦修行・つづいて慶

刈谷布教は午前十時に始まり夜九時半に終る。その間およそ十一時間。隊員には連日の布教があり現地の人々にとっては、たゞえ一日たりとも千載一遇の機会であり、隊員の「拳手倒足、一句一言がそのまま布教となり、信する者にも感じらるゝ者とも大きな影響を与えるものであれば、街頭行進中はもとよりのこと、法要、講演、座談会中であっても、また列車中、

休憩中であつてさえも、朝起床以來、夜就寝するまで隊員の案張はつづき、就寝して初めて一日大福をなかつたこと、感謝される。

尾張一の宮の

大立日響日

開くれば七月二十六日（布教三日目）この日の布教は、午前中尾張宗務所管内の一の名古屋市、午後日名古屋宗務所管内の名古屋市街。共に愛知、三重、岐阜の三県下青年五十数名によって結成され

(14)

て、中京行学会へ大表宗会議員長谷川正慈師（のち三種）、並に名古屋、尾張両新の善隣による。

朝七時十一分、浜島妙法尼以下刈今喜庭会千數名の信徒と共に刈谷駅にたら、八時六分尾張一、宮駅に降りたてば名古屋宗務所長閑留禪師、尾張宗務所長吉田友禪師、行学会長長谷川正慈師以下僧徒およそ百名、身延山本願人会、尾張千人講等々檀信徒およそ五百、白一色の前の日除け帽子をかぶり、皆輝姫鏡のもとで裏鼓符鼓

してあり、その有林口は鏡と言おうか、勇壯と言おうか、あたりを払つばかりのものへしさ。開けは帽子を三百用意した所、たちまち足りなくなつてしまつたという。

八時二十分行動開始、数百丁の法華口耳を舞し地軸をゆるがす。若き尼僧さん十数名口、豪傑配布区一手に引きつけ、交通整理の役

員は早くも汗を吹く。

駅前繁華街、銀座通り、本町通りに大音響を起し、壯大な眞着田袖社前に集結して街頭説法。つづ

いて社頭を一周して市立体育馆そばの忠旗碑前広場に到り説教五、六立て、吉田所長導師のもと、自成団一巻を供えて戦父横死の方靈をくどらう。

その法要中、市教研修生の横川君、学三の藤森君、学二の早坂君の三名が豪傑豪傑とちつて次々に剝れる。

昨日につづく二度目の犠牲、直ちに急救し、その日の岩石所懇田の本巣寺に收容する。

法要後、行進田は、荷物中の真

初バス三台に分乗、信徒の二台は名古屋テレビ塔下へ向い、行学会有志と布教隊の、管陣六十数名のバスと布教車は名古屋駅前へ向う。

名古屋市街の

大行進

午前十一時、名古屋駅前広場の大旗幟の中に、二歳の玄団旗をひるがえす。長鼓の鼓頭を差し、人間礼拝、立正安國、世界平和の勧子吼は、さしもの難音を一時に止める。

午後一時、本遠寺伊藤友清師の

これより僧侶の者はかり六十数名、名古屋市豪華華麗の広小路通りを行進、朝日新聞社前をアマドーレビ塔へ向う。ビルの谷間、法音はビルからビルへと次々に反響しあい、あたかも天地をゆるがす雷鳴の市街を通り抜けるに似ている。正十二時テレビ塔へ到着すれば既に塔下には千余の僧俗、黒山のように囲集しており、小憩中食中更に四方より一波また一波、信徒は密教して塔下へ集まる。

号令一下、千二、三百の大行進が起る。隊列は延々數百メートルの長蛇をなす。

昭和三十六年の夏、伊勢湾台風

災害三回忌に当つて身延山街頭布教が名古屋市街に展開されたことがあつたが、当時をも凌ぐ此の日の大行進に、轟轟する信徒の歎は、感動の涙に光つてゐる。

交通巡回一ヶ分隊が交通整理に当り、新聞各社、放送局、テレビ局員が一齊にカメラ、ハミリで撮影を始める。

榮町、松坂屋前、上前津の大通りを行進し、金山橋に到つて香取旅館主西村みささん（身延山大本願人）の本宅にて小憩。

三十七度に近い炎暑と長距離の市中行進、老いたる信徒の疲労は甚しい。然しそれをも克服する意の花びは、汗にまみれたすべての人々の顔面に輝いてゐる。

再び行進を起し、慈田駅前をみて神宮東門より境内に入る。

熱田社宮正式参拝

(二八)

の鳥居へと進む。法蓋口招々として熱田の森にございます。

熱田神宮は三種之神器の一つヲサナギのツルギを奉つてゐる。曾つて日蓮大聖人が建長五年四月二十八日の立教開宗と先だち、伊勢の大廟に三大誓願を奉上してより青漫山へ向う途中、この熱田神宮にも参拝されたといふ。

千余名の行進団は二流の玄巻旗

を陣頭に伊藤師の先導のもと僧陣、檀信徒の順、整然一列縱隊となり、玉砂利をふんで第一の鳥居、第二

の鳥居へと進む。法蓋口招々として熱田の森にございます。

社頭に到着すれば、あらかじめ代表若干名のみ本殿玉垣内に入つて、正式参拝するといつ打ち合ひであつたのにもかゝわらず、この堂々たる参拝に感動した神官守当局の特別の計らいにより、にわかに僧侶も信徒も全員一緒に正式参拝するようになる。

神官魔門といふ本殿といひ、そ

の移行は伊勢神宮のそれと殆んど変りはない。その本殿玉垣の内へ

千余名の隊員、一人一人本殿玉垣へ
へ縛々と参入する。

神宮の祝詞奏上の後、日高隊長
代表して三事を奉奠、導師となつ
て自我偈一巻を奉誦、法鼓は雷鳴

の如く轟き、つづいて報恩偈の一
第「日蓮慈悲眩大なれば南無妙法
蓮華経は万年のほか未來までも流
布すべし……」を奉唱、はるかに
と百年前、大聖人熱田参拜の在時
を想ふ。

玉垣を出る時、神主より一人一
人に神宮紋入りの素焼きの盃を貢

本遠寺大講演会

午后三時本遠寺到着。休む間も
なく長谷川正徳師導師のもと立正
世界平和祈願大法要。僧陣およそ
百名、信徒およそ千名、さしもの
広大至本堂は立難の余地もない。
法要後、奥所長の挨拶があり、
つづいて正法宣佈大講演会。

一、日蓮聖人の教義

身延山大学教授 飯沼龍遠師

き、これより西門を立て本遠寺へ向
う。

一、創価学会の動向

行学会々長 長谷川正徳師

一、世界平和と宗門の使命

身延布教隊々長 日高白象師

滔々たる熱弁は、うごるような
署さぬまい、満場の聴衆、身動き
もせず聞き入る。六時講演会終了。
布教隊は隊員浜島法立君の大学卒
業後、晋山する南区豊田本町の万行
寺へ参拜。

七時より「宗門青年運動の在り
方」について行学会有志と座談会、
解散十時半、就寝十一時。

この日の布教は午前八時三十分
尾張一ノ宮駅頭より始まり、本遠
寺座談会終了まで、実に十四時間
にも及んでいる。
ちなみに本遠寺境内には戦災焼
失前に日吉宝とされた法華堂があ
り、戦後再建されているが、本尊
は伝教大師開眼の立像秘算像、む
かし熱田神宮に祭られていたもの。
住職伊藤友清師は隊員佐々木友学
君の師匠に当り、また 日高隊長
の立正大師時代の旧友でもあった。

本語の題写と題物

題字「鷲峰」の文字は日蓮宗鷲長身延山八十六世法主藤井日靜親王の御染筆。鷲峰とは歎尊が法華経を説法されたインド、靈鷲山の略称、靈鷲山の全名が禿鷲の頭の形に似ていて、所から、「古來」の名づけられた。日蓮聖人が身延山を「本朝の靈鷲山」といわれたのは法華經説法の内容が密乗性による。

又遠本仏教導説法のインドの靈鷲山と、本化上行菩薩の南遊
曰蓮聖人達磨の事記「本朝の靈鷲山」、「西山」同様に遺失し、
且つは自我傳の中の「一心欲見仏不自經遠命將戒及蒙鷲頂出靈
鷲山」の意を合わせて本語の題号とするもの。ちなみに密乗草元
政上人の法号を鷲峰院という。

三重県四日市へ

明くれは七月二十八日（布教四

周辺以下北勢寺院各聖をはじめ市内靈信徒百名あまり寒波得機して
いる。

日目）一の日は三重県宗務所なら
びに北勢寺院の後援による四日市
市教・

朝七時、本遠寺伊藤而以下行学
会有志、刈谷よりついて来てている
身延会信徒数名と共に、貸切バス
で本遠寺を出発、快適な名四国道
を四日市へと向う・

七時四十分、近鉄四日市駅前広
場へ到れば、既に宗務所長伊藤如

正八時、駅頭獅子吼オ一声によ
つて折伏の火がたは切れ、早朝
雨戸もあけやらぬ商店街の真只中

へ、黒鼓宣言・マイクを通して学

会の邪義を痛撃・驚いた市民が寝

卷のまゝ外へ飛び出す・すかさず

数箇がくはられる。

市街自抜き通りを堂々と行進し

諏訪神社・安樂寺・智玄寺・本覚寺に参拜・参拜中も折伏の手を進

め、特に学会の三重県支部の門前

では、念には念を入れて折伏する。

午前十時、本覚寺前よりバスに

分乗・富田浜・妙延寺へ向う・学

会の卑劣な反動は、この富田浜の

布教中に起る。

富田浜の

学会反勵

午前十一時、妙延寺にて布教師

会長浜島秀温師導師のもと北勢寺

院・布教隊總出仕・滿堂の信徒と

共に莊嚴なる施餽鬼大法要を虔修・

これは布教隊のため妙延寺莊弘三

木兼總法尼が、恒例の年中行事を

特に一週間早く繰り上げたもの・

法要後、伊藤所長の挨拶につづ

いて日高隊長の「本仏信仰と先

祖供養」について講話。

中食は午后的二時、三時より数自本の施設鬼怒瀬を奉じ、船を出して沖あいに於るかに海上水向外營として冲あいに於るかに海上水向外營を行うため、隊伍を整え、轟鼓して海岸へ向う・途中、富田町内の街頭布教、再び学会折伏の火ぶたを切る。

定刻四時、予約していた船が来ない。聞けば船頭が皆学会々員、支那指令によつて船を出して日本へ來ないといつ。

船は轟鼓喧嘩の中、うちよせら波のまことに、遙く大漁港へと流れて行く。印象的で光景であった。

塔婆は轟鼓喧嘩の中、うちよせら波のまことに、遙く大漁港へと流れて行く。印象的で光景であった。

卑劣きわまる学会の反動・正面如つて反響出来ない学会は、裏に

夜は七時より妙延寺本堂で廣報應答座談会、終了九時・隊員は海

の潮風にふかれて心氣旺盛、明日の準備を整え十時二十分宿す。

大和高田へ

七月二十九日（布教五日目）布教軍は早朝五時妙延寺を出発、本陣にて時三木法尼以下檀信徒に見送られ、近畿高田駅より大和高田へ至り。

一日の布教地は、奈良県下の大和高田市と移井市、共に奈良県連合立正青年会の主催、宗教所、

市教師会の後援による。

九時三十五分大和高田駅につけば駅前広場に奈良県宗務所長大島鳳祥師以下管内寺院各聖十數名、ならびに庄屋にかけつけた大阪布教布会長和田意連師等々の現地僧徒は、それべく黒染の衣の袖を肩までたくしあげ、手甲・糊糠に天台笠、身延山布教隊と同じ服装に稟々しく身を固め、三百余名の信徒は皆白一色、二流の玄題旗と立正青年会の大旗を押し立て、隊伍整然、轟轟絢爛していり。

主催大和高田青年会の連合体

であるだけに、さすが青年の数が

正倒的、中でも桜井立正青年会は

八十名、小泉の立正靈山今は五
十余名、大学、高校、中学そして
小学校の青少年男女までもはち切
れんばかりの若さで花々としてい
るのも頗る美しい。

九時四十分、大島所長の第一声

によって大行進は始まる。僧車の

黒色と信徒の白色が美しいコント

ラストをなす。商店街の中央に到
つて、交互にマイクをとり布教四
大隊目について獅子吼が轟く。左

家青年も勇敢にマイクを通して市
民に立正安國の大義を述べる。

一時十二時、學會折伏の斗將吉田
意慶翁の妙法寺で小憩中食、午后
一時より妙法寺を経て市中漫なく
行進、二時二十六分高田駅発電車
で一行はそのまゝ、桜井へ向う。

法都と化した。

桜井市

午后二時四十二分桜井駅につけ
ば、駅前広場には妙安寺檀信徒を
はじめとして県下遠近の信徒が団

本体としてひしめいており、行進団はおよそ五百名近くにふくれ上る。商店街入口には「歡迎身延山學生活教隊」のアーチが立てられ、市中の辻々には桜井立正青年会の教旗、ポスターがはりめぐらされている。

行進は三時より夕刻六時に及び町という町、通りといふ通りは一つき残らず、しらみつぶしに裏表宣令、要所／＼の教法には信庫は櫻本蓮子さんまでマイクをとり、

市民の耳目を奪い、心魂をふるいたこと、さながら桜井の市中は一時ト法部と化した觀を呈する。

六時より宗務所妙安寺にて大島所長導師のもと旗下修法和懸出仕して立正世界平和祈願の靈修・づいて立正青年会より、会員一同して縫い上げた白衣三十枚が布教隊に寄進伝達され、次は、「本仏の淨土と平和世界の建設」と題する日高隊長の講演。その講演中、

に案内し、講演後の座談会で元請

までに破折する。

倒れてもやまん 大阪街頭布教

滿場信徒の声、氣然と起り、久遠の本仏歡喜を本尊とせよ。遵理即寂光の淨仏國土建設こそ、世界平和の大道である」という与論津賀、期せずして 講演座談会は、この日の布教の見事なフィナーレ

七月三十日（布教六日目）この日の大阪布教は、大阪市布教布会修法布会の主催、大阪市櫻信綱議会日蓮門下大阪連合団の後援による。

となる。

座談会十時解散、さめやらぬ感動の中、二つに就床。

早朝四時起床、大島所長の案内で梅井駅六時五分、大阪天王寺へ向つ。途中、王子駅で遠山翁子先生以下、奈良の立正靈山会音年部二十数名が会流。

七時三十五分天王寺駅に到着、
駅前の天王寺公園入口につければ、
大阪業務所長奥院学選師、布教師
会長和田意舞布を行じめ五十数名
の管内寺院各堂以下黙教徒教する
檀信徒およそ一千名。

特にその中、身延山大本願人風
本宗治氏夫妻が、旅二十九日東京
上野の精養軒における身延山藤井

法主親下の管長就任祝賀会に列席
し、奥西信徳を代表して祝詞を述べ、
直ちに折り返して夜半二時大
改につき、一睡する間もなく早朝
手甲、脚絆にウチワ太鼓といふ服
装に身を固められていたのに付、
隊員一同いやがうえども鼓舞激励
される。

午前八時、布教車のマイクは天
王寺公園入口より、廟のラッシュ
にひしめく天王寺駅に向つてすえ
改につき、一睡する間もなく早朝

を吹くよう互に街頭、認法を展開。

教義配布者はあよそ五十名、四名一組となつて八方に散り、布教中あよそ一万枚の教義を配布する。

この間、隊員中、而教研修所書

記の吉松君、宇一の石橋君、高二の神藤君の三名が相次いで倒れる。ことに吉松君は全身もくみ高熱を発している。直ちに急救、午後の義演会場妙聖寺へ収容、医者の手当をうけさせる。

但し犠牲者の出るごとに、隊員の斗魂いよいよえざかる。

大坂市街の交通の激しきこと東京をしのぐ。ために交通巡回二十名ばかり義導と護衛と来る。時に午前九時、堂々たる千余の大行進は起り、先ず四天王寺へ向う。

四天王寺は聖徳太子が用創され在曰本最初の寺院、五重の塔を中心とする宏大華麗な境内をめぐって本堂前に集結。自戒偈一巻を誦すれば、千年の梵音、堂宇をゆるがす。

その境内には聖徳太子を崇る御堂があり、裏手に日蓮聖人の石像

が立っている。これに参拝し法味
を語上。

次に正門に到つて街頭説法、聖徳
太子が万葉第一の法華經義疏を著
わされた立場から、世界の宗教、文
化を統一するものは法華經のみと
獨子認する。

やがて行進は天王寺警察署に到
り、ここで署長福原のもと交通安
全を祈願。炎天下、接待され茶にお
茶は、まさしく甘露。

真夏の太陽は容赦なく照りつけ
る。全員ほこりと汗たまみれるが
る。

らも、数百メートルにも及ぶ長蛇
の行進は、なお轟轟、囂々、歩調
をあわせて一糸乱れず、寺町へ入
り、正十二時、予定通り市内南区
谷町八丁目の妙満寺につく。
銀筋の本堂前廊内にはテントが
はりめぐらされており、自殺団奉
唱後、直ちに中食・倒れた三名の
安否をとえは、書院別室に氷で頭
を冷やしながら昏睡しており、「熱
も下った。一夜明くれは大丈夫」
といふ医師の言葉にホッと安堵す

学会折伏 大講演会

午後一時より奥邸所長導師のも

とて灰修法酒会、布教節会、管内
寺院、布教隊懸出社し、満堂あふ
る。檀信徒と共に立正世界平和祈
願大法要を厳修。

午後二時より五時まで学会
折伏大講演会・特命布教師八箇日
忍師は多年学会折伏のため全国を
遊説している千軍万馬の斗對、二
手口で及ぶ大獅子吼は、豊富な体

万雷の如く響く。

講演中端頃、管長祝賀会のため
身延山の守護をあずかっていた岩
間布教師長が、取るものも取りあ
えず左腰にかけつける。

隊員一同並々として部長を迎え、
合掌して玄関三禮すれば、万感胸
に迫って等しく眼を熱くする。部
長も慈父のように隊員の勞をねぎ
らう。病床中の者も半身を起して

「もう大丈夫です」という。うるわしき布教の道交が展開される。

講演会は八須師に代つて若間部長の顛となり身延山の尊嚴を力説、妙聖寺西川吉義師の挨拶あつて三時三十分大会終了。

「これより一行は、貸切バスで、この日の宿泊所布施の宝樹寺へ向

こう。宝樹寺は隊員和田君の尊父和田布教師会長のお寺。途中、奈良の立正靈山会の一一行等は、明日の

この時、隊員藤原君の実兄であ

る大坂東洋印刷社久長藤原秀喜氏も会場へかけつけ、本懸毎号の表紙印刷一切を寄進するむね申し出
宝樹寺では六時より懇親会・宗

会議員・宗務所長、布教師会長、修法師会長はじめ管内寺院各聖会らびに禮信徒協議会長はじめ各寺院護持会長、身延山大本願人岡本宗治氏夫妻、溫室耕次郎氏等々百名をこえる人々が席をつらぬ各自宗門宣揚に關する所見を述べて有意義な座談会となる。

くする。

西ノ宮布教

明くれは七月三十日（布教と
日目）二の日午前中西ノ宮市、
午后は神戸市の布教、共に兵庫県
東部宗務所、管内寺院の主催によ
る。

布教車は朝六時半宝樹寺を出発

本隊は和田氏に見送られて七時半
布施の小坂駅より阪神電鉄今津駅
へ向う。

朝の物凄いラッシュともまれな

がら九時今津駅につければ、既に駅
前広場には宗務所長畠田栄妙師は
じめ管内寺院各堂およそ三十余名
黒衣、五緋、手甲、脚絆、綱代笠
に身を固め、淨願寺婦人会、管内
寺院檀信徒、奈良の立正靈山会の
一行、尼ヶ崎の辰巳妙隆法尼の一
行等々およそ三百名ばかり、隊伍
整然として整列している。

直ちに玄題説法を押し立て、早朝

の祈願説法の一聲を放つ。九時三
十分市中大行進を起し、十一時津
門吳羽町の宗務所淨願寺に到着。

門前で街頭説法を行い、本堂に

一路神戸布教へ向う。

上っては裏田所長の挨拶につづいて講演会、先ず岩間布教部長は、

「小罪なれども懲悔せざれば惡道をまがれず、大罪なれども能く懲悔すれば罪消ゆ」

という大型人の御遺文にもとづいて信仰即生活の在り方をたゞしつづいて日高隊長曰「本仏信仰なくして眞自信仰はありえないと断言、強い感銘を與う。」

このあと中食をすませ、十二時三十分、門前より貸切バスに分乗

三十五年ぶりの

神戸大行進

神戸商業布教の足跡は生田神社二、日源平の合戦で有名な生田の森のあと、南故入りの漫幕に飾られて表題する神社境内にて、神戸市内寺院信徒千余名の大衆が持機しており、西ノ宮の僧俗合流すれば僧陣およそ五十余名、檀信徒およそ千数百名。予想もされない大集団となる。

高田所長の激励の挨拶おわるや
 義理一声社頭をゆるがす。日高隊
 長みずから陣頭指揮をとり、二流
 の玄蕃旗につゞく親池僧陣は一列、
 千数百の檀信徒は二列鎧隊、隊列
 は延々一千メートルをこえ、青年
 会は數箇配布、身延山学生布教隊
 は全員隊列の外側に分散して唱讃
 唱詠、歩調々整に当る。

生田神社飞出ればセンターホームに
 つゞく元町通り、こゝは神戸都心
 の最繁華街、街路の上は日よけの
 遊具、延々たるドームの如く、一糸乱れ
 ら千数百の義理は、文字通り耳を
 韶する大音響となつて市街をゆす
 ふり、堂々たる大行進は、直ちに
 人々の眼を奪う大絵巻の如く、前
 けは今上天皇即位記念御船式が神
 戸の遠で行われて以来実に三十五
 年ぶりの大行進という。

沿道蔭茂合掌する者もあり、目
 をみはつて「美しい!」「さすがは
 日本第一」と連発する声もいた
 る所に聞える。

屋根におわれていて、さながら

義理説法は元町通りの身延山開

西本願人会長広田定一氏の店の前
マイクをとつた日高隊長の、壯絶

きわまる大獅子風は、さながら大
聖人ありし日の辻説法を懐ぶが如
く、法華空を傳する者にも、信じ
ない者にも算しく凜然として聲を
正しむ。

いよいよ、このゆる轡義大行進は、
太廟公を祭る湊川神社前、新開地
を至て午后五時湊川公園音楽堂前
に至る。二、三で岩間布教部長、広
田会長の挨拶あつて、布教隊は禮
儀を正す。

宿泊所永室町の行守寺へ向う、
行守寺は百万ドルの夜景を誇る
高台にあり、ヒヨドリ巣立に近い、
一帯は源平の古戦場、巣内の一角
に平家の女官自害の趾がある。
身延山特別大本願人秋山毎若氏
夫妻、広田氏をはじめ近在の檀信徒
等あふれる新築の本堂で佐私清
木泰伸氏の導師のもと立正世界平
和新願、ついで岩間部長の講演
は、実例をあけて不自盾身命の危
険を力説、深い感動を与える。
夕食は懇親会を兼ね、宗門百年、

僧侶の在り方にについて討議、有意義な一時を過す。

この時、大阪の初田布教師会長

が弟子と二人で大鳳呂敷をかつぎ行安寺の高台を升び、しよりになつて来寺する。

月呂敷の中は二十枚の白衣、こ

れは連日汗とホコリでドロドロになつていた隊員全部の白衣を脱衣、宝樹寺一泊の折、世若人一同、徹夜で洗濯し、神戸布教中にかわかしてくれたもの。目にしむ白衣を

々しい街頭布教の、隣の支度の一班と痛感、隊員一同だべく感謝合掌するのみ。

兵庫県西部管内 青年行学講習会

明くれは八月一日（布教八日目）

布教隊は差廻しのハイヤー五台に分乗、行安寺を辞し、神戸駅裏、富田所長、清水師をはじめ檀信徒に見送られ、神戸発九時三十九分、本龍界へ向う。

車中、奈良の立正靈山会青年部

一行二十名と合流、この青年会は七月二十九日の奈良県下の布教以來、連日行動を共にしており、高校、中学、小学校の少年、少女は疲れもみじむ意気軒昂、車中も隊員との寒暄宣令を飛び廻る。

夜落と姫神線に乗りかえ、十一時四十二分本郷駅につけば、常照寺住職谷口宗敏而等代表の出迎を受け、市中寒暄して常照寺につけば、宗務所長田中行明所をはじめ

管内寺院各堂四十余名、信徒およそ二百余名、境内を埋めて寒暄寺機しており時を得て本堂にて青年行学講習会を開講する。

この講習会は、布教隊が龍野布教を志すに当り、常照寺谷口所が御寺の三一会に計り、三一会は宗務所に計つて遂に西部檀信徒協議会が主催となり、同宗務所、管内寺院四十三ヶ寺が後援し各寺住職はそれと、總代、青年信徒を動員して一泊二日の青年行学講習会を開催するに至つたもの。まことに

宗務所が壁内をあげてかゝる催し

を行ふこと日、全国宗門に魁がけ

た近年の快挙といつほかない。

午後一時、開講式は田中所長、

管内檀信徒協議会長飯塚謹重氏の

挨拶によつて始まり、宗會議員園

田穂公師の司令によつて直ちに講

義にうつる。

第一回講義（一時～三時）

「現代社会における菩薩」

身延山布教部長 岩間湛良師

第二回講義（三時半～四時半）

「西遊行の基本について」

京都本法寺貫首 湯川曰淳師

第三回講義（六時～七時）

「仏陀をめぐる人々」

西新市教婦会長 矢谷惠法師

第四回講義（八時～十時）

「日蓮聖人の人格とその教え」

京都特命布教師 三木漸蓮師

毎期日の講習であればスケジュ

ールはぎつちりと組まれており、

寸秒も惜む講師の熱弁は、むれる

ような署さぬ吹き飛ばし、二百數

十名の講習生は一言半句ものがさ

じと喰い入るようにならざる。ま

大名講義、一とくもうけられた座談会には講師を中心として活発な意見交換が展開する。

さしもの本堂にも人は座り切れず、様剣や外にもうけを二ヶ所のテントまでもけみ出しており、各所のたき出しがれで火事場のよう、

夜十時に講義が終り、夜食が出て十一時就寝。蓮習生は本堂、祖師堂、書院、庫裏そして境内二棟のお堂に分宿する。

朝くれば八月二日（講習二日目）行脚布教としては九日目、朝五時起床、朝勤、清掃、朝食をすませば早速講義、この時、身延山より大場玄亮翁がかけつける。

オ五回講義（八時～九時半）

唱題行の実際について

京都本法寺貫首 湯川日厚
才六回講義（十時～十二時）

法華経の人間理想像とその実践道――特に曰蓮聖人、吉次實治

龍野街講布教

良寛尊仰にちなんで——

身延山剣勲隊長 日高白衆師
午後一時より二百数十名の講習

生、憲鼓して山門を出、三木淨土
師の先導で報光寺へ向う、堂々た
る街頭布教を展開、囲集する市民
に向つて人間礼拝、立正平和、學
会折伏を繰り鳴する。

四時帰山、小憩して座談会、五
時閉講式、講習生には一人／＼修
了証が授与される。

わずか一泊二日、初めて会つた
人々ばかりなのに、いよいよ解散

せんとして互に合掌留連すれば、
万感胸に迫つて頬に涙する者あり
る。

その夜、布教隊は常照寺慈代花
房幸二氏宅に宿泊、明日最後の布
教の英気を養つ。

有終の美を飾る。

姫路の憲鼓宣令

八月三日（布教十日目）この日
日姫路市内寺院主催、宗務所後援
による姫路布教。そして布教隊に
とつては夏期行脚布教の最終日。

また斗あらうになるものがある。

講習会中、充分体力の回復を計つた布教隊は、本籠野巻午前九時十一分、市内檀信徒に見送られて姫路へ向う。九時三十分姫路につけば、田中所長をはじめ講習会中と顔みしりになつて寺院各堂、檀信徒をあわせておよそ百数十名の歓迎する中に出迎えられる。驚いたことに、此の日も奈良の立正靈山会の青年・尼ヶ崎の辰巳妙慶法尼の一行の参加が見られる。正十時、歓喜獅子吼オ一声によ

つて姫路布教の幕は切つて落され、交通巡回の先導により檀信徒をまわる駕前繁華街を壹々と行進・行進するにつれて人はいよいよ集り、前進するのも思うにまかせない。

こゝは神戸のセンター街、元町通りと同じく街路の上が屋根でおわれていて、ために裏敷は大音響となつて口わかる。

商店街の中央で街頭説法、まず田中所長がマイクをとつて熱弁をふろい、これに布教隊員が交互に代る。商店街の突き当りが姫路城

佛舍利塔参拝

を望む広い公園、ここで雨びマイクを胸内へ向けて街頭説法、入れ代り立ち代り訴える所は、「速かに信仰の寸心を改めて、囁きの一善に帰せよ」ということ、「身延を本とする囁きなくして個人の幸福も人類の平和もありえない」ということ、ただそれのみを要角的に普辺する。この日が布教最後の日と思えはこそ、声も白熱して肚の底から節子風する。

正十二時、宗務洋法華寺に到着、中食をすませ貰てバス三台に分乗、それより一路仏舍利塔へ向う。宝塔は郊外丘陵にあり、ここに立てば姫路市を一望に見渡す。中央大宝塔は久遠の本仏教尊の仏舍利を奉安し、これを囲む数個の小宝塔は市民の納骨塔となつてゐる。パゴダ式異国調の近代建築、その莊嚴にうたれる時、こゝに納骨する市民の幸いを思ふ。

姫路市長夫人に出迎えられて大室
塔の内に入り、中央の厨子に納ま
る仏舎利に対し、田中所長導師
のもと大音声に白哉笛を奉唱、感
動のまゝ塔外へ出れば、つづいて
市長夫人のもうけられた躰接の会
館におけるレセプションに列す。
席上、夫人によつてメンゼン
が読み上げられる。

「南無妙法蓮華經 身延山學生

布教隊の皆様をお迎えし、一言御

挨拶する機会の得ました」とを光
榮た存じます。

私も日蓮宗でござります。この
おび日蓮宗本山身延山より展
開されました荷蘭布教は、まこと
に宗門に対する覺醒の壯舉と言わ
るべきものであります。殊に
学生の身をありがながら樂しまべき
夏休みを返上し、酷暑にもめげず
連日長途の布教をされて此處に至
りました皆様に対しましては、深
く敬意と感謝の意をあらわされま
にはおれません。

敗戦後の今日、宗教界の歛黙と
沈黙が一般的の口にもされており半導

折から社会の精神的道義の高揚に
大きく貢献し、新しき日本国再建
のため、日本の莊・日本の眼目、

日本の大船とならんと呼ばれまし
た日蓮大聖人の御心を体して、今
こそ日蓮宗がこそて宗教界覺醒
の法鼓をつつべき時ではないでし
ょうか。

これに対しても日高隊長は、隊員
に代って歓迎を感謝し、御期待に
そつとう今後一層の努力をつづけ
ることを誓う。

午後二時三十分、雨びバスに分
乗、仏舎利塔より慰靈塔へ向う。

行脚布教の汗とほこりとまみれ
た背筋の不自覺負命の祈りの御姿
に接して感激を新たにすると共に、
この運動が増々大きくひろがり、
一日も早く、この平和の法鼓が全
る。

妙法華華経

中央数間とも及ぶ御影石には、
戦災都市を示した日本地図が浮き
彫りにされ、台上中央にそびえる
十字型の碑、台の左右には戦災都
市ごとに丈余の石柱が屏風のよう
に林立していて、近代的設計の中
にも慰靈塔の莊重さを漂わしてい
る。

心から詠坐唱題し、三時三十分

法華寺に帰着・丸十日間に及ぶ行
脚布教を慰勞される晚餐会に臨み、
立ち渡る身の浮雲も晴れぬべし

たえめ御法の驚の山川

一同聖教を奉誦、午后五時解散
ハイヤ十五台に分乗し姫路駅より
身延帰山の邊につく。時に雷雨來
る。布教十日間もち、一だえた雨が
車中によくひどくなつて来る。

布教十日間、陰と陽とお世話に
なりました各地皆々林へ、心か
らお詔申上げます。

△身延山布教運動隊一同△

○写真説明。

表紙の写真は、近年中にインドの王舍城私金別塔正面本尊として身延山よりインドへ寄進される金銅の釈尊像。現在身延山本堂内陣に安置されている。その原型は身延山奥之院参道二十九丁目の三光堂前の露座仏。これは今よりおよそ二百數十年前、身延山才三十二歳寂院曰蓮上人の代京極庄瀬守高勝が願主となつて造立され、明和九年（今より一九一年前）六月身延山才四十五歳寂院曰蓮上人の代に再興、更に屡々修復が加えられ昭和三十八年四月八日、身延山大本願人屋内貞良願主となり平安美術において原型と寸分もござらず再建されたもの。

なお表紙の紙、印刷一切は大阪の東洋印刷社久良藤秀憲氏が才五号より海号寄進するようになったもの、これに紹介して感謝の意を表す。